

世界平和の危機：ロシアのウクライナ侵攻

私たちの世代は歴史上かつてなかった時間を生きてきたのかもしれない、と思うようになりました。かつてなかった・・・というのは、自分たちの生きる行路を大きく変えてしまうような大戦争が2次大戦後75年もの間、なかったということです。私は、これからもそういう時間が続くと思っていました。しかし、今、75年間の平和は歴史的時間の一瞬であり、次の世代は破滅的な大戦争を経験するかもしれない、と恐れを感じています。

ロシアの五方面から一斉のウクライナ侵攻、私はまさかキエフを含むウクライナ全土の軍事制圧をめざして侵攻するとは思っていなかったのが衝撃をうけました。ナチスのポーランド侵攻と同じような電撃的な侵略開始でした。私は、事実と論理に基づいて(つまりできる限り科学的に)、できるだけ確かな情報と歴史的な事情を分析し、この戦争を考えました。

新しい戦争の様相

プーチンのウクライナ侵略、戦後の世界安全保障の歴史の重大な局面だと思います。
①他国の政治的独立を武力によっておかしてはならない、という規範(注1)が真っ向から破られた、②核の抑止力(注2)に代わって、核の脅迫がおこなわれた。

プーチンの戦争目的

プーチンの言う侵攻理由はころころ変わりました。侵攻当日は「これ以外の選択はなかった」、これでは理由にならない、次に「ウクライナ国内のロシア人の保護」、キエフに保護を必要とするロシア人はいない、すると次に「ウクライナとロシアは同一民族だ」、これは「だから併合していいんだ」と聞こえる(注3)。次には「ウクライナ国境に核があり危険だから(攻撃した)」そんな話は聞いたことがないし、それならばロシアも侵攻後まず最初にそこを制圧するはずだろう。そして今度は「ウクライナのネオナチによるジェノサイドをやめさせる」、ウクライナのどこにジェノサイドがあるのだろう。

ウクライナの政治的支配が目的

要するに、プーチンは本音と言えないだけであり、真のねらいはウクライナの政治的支配です(クリミア併合と同じ)。速攻でキエフの政府を倒し、かいらい政権をたてる、これがプーチンの当初のもくろみであったことは右から左までほとんどの論者が認めているとおりです。停戦交渉では、ロシアはウクライナの武装解除・中立化を要

求めています。ロシア軍の軍事占領下でウクライナがそれを受け入れることは敗北を認めてロシアの支配を受け入れるということです。

プーチンは、ウクライナに「NATO に加盟するな」と言いながら、ウクライナが NATO に加盟していないのをいいことに侵攻している

ソ連崩壊後の NATO の東方拡大が今回の侵攻の要因だった、ウクライナと西側にも責任がある、という評論家もいます(注4)。しかし、今回の侵攻を見て、私はそれは少し違うのではないかと、思うようになりました。

ソ連邦の崩壊の時は、もう冷戦は終わった、ロシアも NATO に入る、といった議論もあったくらい東西双方とも楽観的な雰囲気でした。その中で、NATO の東方拡大は必要ない、という議論もありました(ロシアも楽観的だったので文書は交わされなかった)。

私は、NATO 解散かロシアの NATO 参加か、がよかったとも思いますが、一方、プーチンの大ロシア主義の野望が旧ソ連邦の国を武力を用いても勢力圏に再び組み込むことだったら、結果として NATO はそれを阻止するのに有効だったことは明白のように思います。プーチンは首相就任直後に起きたモスクワ高層アパート爆破を直ちにチェチェンの仕業と断定し(注5)、チェチェン共和国に侵攻して支配下におきました。また、グルジア(ジョージア)ともグルジア・ロシア戦争を引き起こしました。実際、バルト三国などは NATO に加盟していたからこそ今までロシアに攻撃されなかったと私には思えます(注6)。ウクライナももっと以前に NATO に入っていたら、今回のプーチンのウクライナ侵攻はなかったろうと思います。

ロシアは、ウクライナに NATO に入るな、と要求しています。決して武力を使わないから安心してくれ、だから NATO に入らないでくれ、というならわかります。しかし、プーチンがやっていることは矛盾しています。ウクライナに「NATO に入るな」と言いながら、NATO に入っていないので安心して武力侵攻しているのです。また、侵攻すればかえって NATO の存在意義が高まり、ロシア周辺国の NATO 加盟の動きを引きおこすことは容易に想像できたはずですが、それでもウクライナ侵攻を開始しました。プーチンにとって、ウクライナが NATO に入ると武力介入や脅迫が困難になる、その理由で NATO に入るな、と言っていたのであって、侵攻の真の目的はウクライナの政治的支配だと思わざるをえません。

融和から対立へ

そもそもエリツィン時代の初期までロシアは西側諸国と融和的でした。エリツィンはアメリカを訪問してアメリカ資本主義に感激し、アメリカから経済顧問を招いて資本主

義の運営の仕方を学んだ時期もありました(顧問が新自由主義のシカゴ学派だったのはまずかった、ロシアを自由主義経済に変える計画はロシア経済に大混乱をもたらし、プーチンの出番を用意した)。キルギスに米軍基地の設置を認めたことさえあります。そのロシアがなぜ、プーチンになってからしだいに西側と対立するようになっていったか、それはプーチンがロシア国民に広くいきわたった大国主義のノスタルジアをかきたてながら独裁を強化していったのと歩調をあわせています。プーチンは言論を抑圧し政敵を投獄弾圧し時には殺害し(ロンドンで放射性ポロニウムをリトビネコに飲ませて殺害した事件は有名)それを西欧諸国から非難され(リトビネコ事件で両国は外交官の追放の応酬となった)、関係が悪化していったのです。しかし、だからと言って、NATO がロシアに軍事攻撃をしかける脅威が増したわけでもありません。くりかえしますが、ロシアが恐れたのは、NATO によってロシアの旧ソ連邦諸国への軍事的な圧力が使えなくなることだ、と私は思います。

独裁者の国家的自爆テロの脅迫

さらに問題は、プーチンが「あらゆる選択肢を持つ」「全面核戦争になれば勝者のない破滅になる」とまじめに言っていることです。(自国民は壊滅するが)お前たちの世界も壊滅するぞ、というのです。脅かしかもしれませんが、脅かしは自分が本気であると相手に思わせなければ脅かしにはなりません。そして、脅かしを繰り返しているうちに本当に本気になり(ならざるをえず)実行されることがあるのです。北朝鮮が始めた脅迫法で、国家的自爆テロともいうべきものです。

自分が始めた戦争で敗北して戦争犯罪人として裁かれるくらいなら自国民の壊滅も辞さず核戦争を仕掛けるという独裁者がいれば、もう核は抑止力になりません。これが通用すれば、世界は新しい危険な時代……何億人もの死者の出る戦争が現実味を……に入ることになります。私は、プーチンが追い詰められて核兵器を使用する可能性は小さくない、いやそこまでいかないとこの戦争は終わらないのではないかとさえ思う時もあります。新型コロナあるいは今回のロシアの侵攻で思ったのは、自分が生きている間にこんなことが起こるはずがない、とっていたことが起きる、ということでした。

ウクライナの犠牲

「ウクライナ上空飛行禁止は欧州だけでなく世界戦争となる」「ウクライナに戦闘機を提供する国はロシアとの戦争を覚悟せよ」……ウクライナの電撃制圧はうまくいかず、プーチンは脅迫のトーンを強めています。

私は、世界史でならったミュンヘン会議を思い出します。ヒトラーは、ベルサイユ条約で失った東方復活(ロシアの旧ソ連邦の支配圏復活の欲望と同じ)を決意し、チェコに侵攻しました。会議でヒトラーは(英仏が介入するなら)「われわれは来週には戦争に入るだろう」と言い、英仏はドイツの侵攻を認め、チェコはドイツに併合され消滅しました。

今回のロシアのウクライナ侵攻について、NATO とアメリカは軍事的には限定された武器援助だけで慎重に対応しています。結果としてウクライナは独力でロシア軍と戦わなければならない。ウクライナ軍はヨーロッパではフランスに次ぐ軍事力を持っているとはいえ、大変な犠牲を払いながら戦争をしています。ことに、接近戦での損害を恐れたロシアが、長距離のミサイルや砲撃で民間施設を攻撃し人々を殺傷しているのを見ると胸が痛みます。しかし、冒頭で述べた①と②を許さずロシアの挑戦を退けるには、悲痛なことですがウクライナがロシア軍の侵攻を失敗させる以外にない、と私は思います。この戦争の帰趨はウクライナの運命だけでなく人類史的な意味があるのではないかと思うこと、しきりです。

反戦平和運動の課題

ロシアのウクライナ侵攻がまかりとおるような情勢では、日本国憲法前文の「日本国民は…平和を愛する諸国民の公正と信義を信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」が空文になってしまう。

また、軍事同盟である NATO がロシアの侵略を防いでいたという認識の前に、日米安保条約をはじめどんな軍事同盟にも反対、という反戦平和の立場も、説得力を減じてしまう。その意味でも、今回のウクライナ侵攻は、今までの反戦平和運動の基本的な考え方を超えています。

軍事的解決に頼らない反戦平和運動が、今回のような核大国の軍事侵略を、どのようにして抑えることができるのか、人類史のおおきな課題だと感じています。

注 1. 「いかなる国の領土保全又は政治的独立に対して、武力による威嚇又は武力の行使を、・・・慎まなければならない。」(国連憲章)

注 2. 核戦争になれば双方ともに壊滅するので、核戦争はできない、という論理

注 3. プーチンは「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」という論文を発表しているそうだ(2021年7月30日読売新聞)。

注4. ウクライナに問題がなかった、ということではない。オルガルヒ(経済利権グループ)が政権と癒着して汚職・腐敗が蔓延しているそうである。かつてソ連邦のなかでもっとも豊かだったのに、いまや貧富の差がひろがり、ヨーロッパの最貧国の一つとなり、この戦争の前にすでに国民の1割くらいが豊かなヨーロッパに移住している。また西側、とくにアメリカに問題がなかったわけでもない。ありもしない「大量破壊兵器」で始めたイラク戦争も国連憲章に違反する無法のものだった。

注5. 連邦保安局 FSA(KGB の後継機関)のメンバーであったリトビネンコによると、この爆破事件はプーチンがたくらんだもの、だという。

注6. リトアニア、エストニア、ラトビアの NATO 加盟(東方拡大)は間違っていたらうか、考えてみる。このバルト三国の存立は、歴史的にロシア-ソ連によって支配されてきた。ロシア帝国時代はロシアの一部だったが、ロシア革命の時にレーニンの民族自決の方針により、独立を果たす(1918年)。

しかしこの独立は20年ほどしか続かなかった。第2次世界大戦が始まると、まずソ連が侵攻し(ヒトラーとスターリンの東欧分割の秘密協定)、独ソ戦が始まるとドイツに占領され、次にソ連に再占領された。この戦争で膨大な人命が失われた(リトアニアでは国民の4人に1人、日本は30人に1人)。ソ連占領下のバルト三国は有無もなくソ連邦に併合された(1944年)。

しかし45年の後、バルト三国はソ連邦解体という歴史的チャンスに再び独立を果たす(1990、1991年)。その時でも、ソ連はこれに対してエネルギー供給停止などの制裁を行い、リトアニアの首都でソ連軍・秘密警察による武力行動まで起こしたが、解体に伴うロシア国内の混乱のため、独立を阻止できなかった。バルト三国は、プーチンのやりかたが次第に明らかになってきた2004年にNATOに加盟しました。

現在、バルト三国の国内にはソ連時代に移住してきたロシア系住民が多くいる(ラトビアの場合、人口の27%がロシア系だという)。そして時にはロシア系住民の暴動も起きている(2007年、エストニア)。公用語はそれぞれの民族言語だがロシア語がそれにおとらず使用されており、かつての占領国の母語が自国語より使用されることを怖れる政府はロシア語の使用を制限する措置をとっている(ウクライナも同じ)。ラトビアでは国籍を取るのにラトビア語の試験があり、結果として人口の15%ほどのロシア系住民は無国籍のままであり(これにはEUとロシアの双方から改善要求がでている)、彼らはロシアにビザなしで往来できる。ロシア系住民の保護、というロシアの侵攻の口実は簡単に用意できます。

このような歴史と現状から、バルト三国が、ロシアの侵攻を警戒するのは当然だと思います。3月20日にロシアで開かれたプーチン礼賛集会では、バルト三国もロシアのものだ、という歌が歌われたという。人口が270万(リトアニア)、130万(エストニ

ア)、200万(ラトビア)の小国では侵攻されればひとたまりもない。NATO加盟はロシアに侵攻あるいは侵攻の脅迫をあきらめさせて、三国の政治的な独立を保つ役割を果たしてきた、と私は思います。

吉田賢右 2022.3.28